



Data

監督・脚本: ベネディクト・エルリングソン

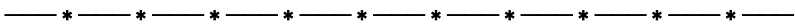
出演: ハルドラ・ゲイルハルズドット
 ティル / ヨハン・シングルズア
 ルソン / ヨルンドゥル・ラグ
 ナルソン / マルガリータ・ヒ
 ルスカ / ビヨルン・トールズ
 / ヨン・グナール

👁️👁️ みどころ

日本では原子力発電所の賛否を巡る議論が盛んだが、アイスランドではドル箱産業であるアルミ精錬を巡る議論が盛んらしい。しかして、環境活動家の女闘士ハットラおぼさんの立ち上がり方は？

日本赤軍の女闘士だった重信房子にも支援者がいたが、本作のそれはわかりやすいし、ブラスバンドの見守り方(?)も優しげだから、それに注目！テロ行為(?)はいつか逮捕されるものだが、『アラン・ドロンのゾロ』(75年)のような“双子のトリック”があれば・・・？

日本は“幸福度”58位だが、アイスランドは4位。それは一体なぜ？『馬々と人間たち』(14年)に続くベネディクト・エルリングソン監督のユニークなアイスランドからの発信作を楽しく鑑賞したい。



■□■ “幸福度” 日本は58位 v s アイスランドは4位 ■□■

日本人に馴染みの薄い国、アイスランドを舞台にした本作は、『馬々と人間たち』(14年)で世間をあっと言わせた(『シネマ 35』未掲載)アイスランド生まれのベネディクト・エルリングソン監督が、アイスランドの“特性”をモロに出した映画。そのため、パンフレットには「アイスランドについて」があり、①「予想外」が当たり前の国、②アイスランドの文化、③自由と平等、の3項目に分けて詳しく解説されている。面積が北海道と四国を足したぐらいでありながら、人口が33万7千人というのが驚きなら、平均年齢が35.6歳というのも驚きだ。『馬々と人間たち』ではアイスランド特有の「アイスランド馬」のさまざまな“生態”にビックリさせられたが、ベネディクト監督は本作で「一歩間違えば

反政府テロ」になりかねない物騒なテーマ(?)を、ユーモアとユニークな音楽で包みながら力強く描いているので、それに注目!

本作の主人公は「山女」と称されている“謎の環境活動家”のおばさん、ハットラ (ハルドラ・ゲイルハルズドッティル)。冒頭では、天空に向かってアーチェリーの矢を放つハットラの姿がアップで映されるが、これは一体ナニをしているの?そのふてぶてしそうな顔(?)を見てみると、まさに環境活動家そのもので、世の中の矛盾に対する怒りで満ちあふれているが、アイスランドという国はそんなに問題が多いの?ちなみに、南米の産油国ベネズエラでは今、与党と野党の指導者がそれぞれ「大統領」と「暫定大統領」を宣言する異常事態が続いている。この大騒動は、2019年1月10日に2期目の大統領就任式に臨んだマドゥロ氏を野党指導者のグアイド国会議長が認めず、1月23日に自らが暫定大統領に就任することを宣言したため。グアイド国会議長を支持するトランプ大統領は、軍事介入の可能性にも言及しているから大変だ。ひょっとして、アイスランドも・・・? いやいや、そんなことはないはずだ。

ちなみに、3月21日付朝日新聞によれば、「幸福度」は日本は58位だったのに対し、アイスランドはフィンランド、デンマーク、ノルウェーの北欧3カ国に続く第4位だからすごい。日本は健康寿命で2位、1人当たりGDPで24位となったものの、人生の選択の自由度(64位)、寛容さ(92位)が足を引っ張ったそうだが、アイスランドではそれらは十分に満たされているのではないの?ハットラは、一体何に怒りを・・・?

■**■アルミの精錬はドル箱産業! 冒頭の行動を如何に解釈? ■**■****

中国では王兵監督の545分間の『鉄西区』(03年)が重厚長大型の国営企業の都市であった遼寧省の瀋陽が衰退していくサマを描いていた(『シネマ5』369頁)が、それは時代の変化に伴う必然的なもの。世界中どこでも、第一次産業から第二次産業へ、さらに第三次産業に転換していったのが歴史の必然なら、石炭から石油へ、そして石油から原子力へのエネルギーの転換も歴史の必然。そう思っていたが、いやいや、そうでもないらしい。パンフレットにある小倉悠加氏の「孤島の小国アイスランドの文化が育んだ、力強い物語」によれば、アイスランドでは外貨獲得を漁業で担った時代から、イギリスとのタラ戦争を経て、自然資源に頼らない産業を模索する中、アルミ精錬が脚光を浴びたらしい。その結果、海外の大企業が工場を建て、大量の電力を消費し、水力と地熱での廉価な発電はアイスランドの自然を破壊してきたらしい。ちなみに、日本では、かつて原子力発電に賛成していた小泉純一郎元総理が、今や反原発の旗手になっているが、あなたはそれをどう考える?

そんなアイスランドでは、ハットラのような環境活動家が「アルミニウム精錬反対!」と主張して活動しているのは当然だ。もっとも、そうかと言って、アイスランドも法治国家だから、冒頭のようなハットラの行為が許されるのか否かは問題だ。かつて日本では、

学生運動の高揚と分裂の中から“日本赤軍”が生まれ、1970年3月31日には“よど号ハイジャック事件”が、さらに1972年2月には“浅間山荘事件”が発生したが、本作冒頭に見るハットラの行為はある意味それと同じテロ行為。違うのは組織としての行動ではなく、個人の確信犯としての行動ということだけだ。

もっとも、ハットラの行動を追うベネディクト監督のカメラはユーモアたっぷりだし、要所要所でハットラを見守る3人のおじさんによるブラスバンドと3人の美女による合唱団の音楽も面白い。また、当局の追及から必死で逃れるハットラを見て当初は戸惑っていた牧場主のズヴェインビヨルン（ヨハン・シグルズアルソン）も、ハットラの姿から状況を察した上、いくつかの会話を交わす中でハットラと“いとこもどき”かもしれないことがわかると、腹を決めてその援助に乗り出してきたから、これも面白い。

しかして、アイスランドのドル箱の国営産業であるリオ・ティント社のアルミニウム精錬のための送電線を実力で切断するというハットラのテロ行為（？）の是非を、どう考えればいいのか？

■□■この女闘士の表の顔は？家族は？子供は？■□■

連合赤軍の“女闘士”といえば重信房子の名前が浮かぶが、本作のハットラの女闘士ぶりを見れば、まさに重信房子並みだ。しかし、ハットラはあくまで単独犯で、秘密の行動。そして、犯行声明を出さなかったから、当局は人員の動員はもちろん、ヘリコプターやドローンを投入して犯人逮捕に躍起になったのは当然だ。そんな中、彼女の“表の顔”は音楽を愛するコーラスの講師だったからビックリ！もっとも、ハットラには夫も子供もいないようで、今は養子の手続きを申請中。ウクライナからやってくる養子の女の子ニーカ（マルガリータ・ヒルスカ）を心待ちにしているようだから、やはり家族に関しては何らかの曰く因縁があるのだろう。

ハットラの女闘士としての“裏の顔”を知っている官僚で秘密の協力者であるバルドヴィン（ヨルンドゥル・ラグナルソン）は、ハットラの行動が過激になりすぎていると警鐘を鳴らしたが、さてハットラは？また、本作中盤にはハットラの双子の姉アウサ（ハルドラ・ゲイルハルズドッテイル）が登場するが、ヨガの先生をしているアウサはハットラと正反対の平和主義者だから、アレレ。すると、この姉妹は仲が悪いの？一瞬そう思ってしまったが、ハットラはニーカを養女にするに当たってアウサに保証人になってくれと依頼していたから、そんな2人の仲は良好そう。

他方、アウサのヨガの境地は先生を通り越して仙人の域に達しているようで、彼女はアイスランドを出てチベットに移り住むらしい。そのためには保証人が必要だから、アウサはそれをハットラに依頼していたが・・・？

■□■いつか逮捕されるのでは？それが現実には！■□■

本作はハリウッドで大人気のスパイアクションものではないが、冒頭でのハットラのアーチェリーの腕前を見ていると、ジェニファー・ローレンスが主演した『ハンガー・ゲーム』(12年)、『シネマ 29』(234頁)を彷彿させてくれる。さらに、ハットラのそんな警告にもかかわらずアルミ精錬を止めないリオ・ティント社に対する本作中盤での再度のテロ行為(?)の決行とその脱出ぶりを見ていると、さまざまなハリウッドのスパイアクションものを彷彿させてくれる。もっとも、他方では、ズヴェインビヨルンの車に積まれたたくさんの羊の中に紛れ込んで脱出するシーンや逃走中に凍えた身体を温泉に浸かって温めるシーン等を見ていると、これらはまさにアイスランド色がいっぱい。天下の美女を羊と一緒にしたり、泥だらけで温泉に浸けたりすれば、ファンから文句が出そうだが、ハルドラ・ゲイルハルズドッテイルくらいのおばさん女優ならそれもOK・・・?

しかし、重信房子が逮捕されたように、こんなテロ行為を続けていればいつか逮捕されるのは当然。ハットラの場合は、ワイヤーを切断する時のミスで手の平から出た血の跡が発見され、そのDNA鑑定の結果、犯人が特定されたわけだが、その日はちょうどアウサがチベットへ旅立つ日だった。そのため、ハットラはアウサを見送るために空港に来ていたが、そこでテレビに流れるニュースを見ていると・・・。

■ ■ 『キングダム』に続いて、“双子のトリック”を堪能! ■ ■

黒澤明監督の『影武者』(80年)はタイトル通りの“そっくりさん”がポイントだったし、3月8日に観た『キングダム』(19年)も、秦の始皇帝の若き日の“そっくりさん”がポイントだった。他方、『アラン・ドロンのゾロ』(75年)やレオナルド・ディカプリオが一人二役を演じた『仮面の男』(98年)では、双子の兄弟がポイントだった。しかして、本作ラストからクライマックスにかけては、ハットラとアウサの他人には見分けがつかない双子の姉妹とだということがポイントになるので、それに注目!

他方、『日本共産党闘争小史』(32年)では裁判の場で日本共産党の正当性を主張することを目指した市川正一が、党の性格と伝統、その任務と目的をひろく国民に知らせる陳述を展開し、最後は「党の発展は必然である。党の勝利、すなわちプロレタリアートの勝利は必然である」と結んだ。それと同じように本作でも、ハットラの環境活動家としての正当性を主張するのなら、本作後半からクライマックスにかけてそんな法廷モノにすることも可能だ。しかし、本作にはそんな法廷シーンは全くなく、あっけなくハットラには懲役刑が宣告されてしまったから、さあ、本作のクライマックスは如何に?

キム・ギドク監督の『ブレス(息/BREATH)』(07年)では、面会室の中で2人きりになった死刑囚の男と面会に来た女が交わすセックスシーンに驚かされた(『シネマ 19』(61頁)が、アイスランドでも面会の自由度は高いようで、懲役刑のハットラに面会に来たアウサは面会室で2人きりになるから、その後の展開に注目!さらに本作では、そこで突然面会室の電気を含めて刑務所全体の電気が消えてしまったから、アレレ。これは、一体

なぜ？真っ暗になった面会室の中では一体ナニが行われたの？ひょっとして、そこで“双子のトリック”が・・・？

そんな“双子のトリック”が成功すれば万々歳だが、そんな本作のクライマックスはあなた自身の目でしっかりと。電気がついても看守はそのトリックに気付くはずはないから、私たちは『アラン・ドロンのゾロ』や『仮面の男』に続いて、久しぶりに正真正銘の“双子のトリック”を堪能することができるはずだ。しかして、アイスランド発の“おとぎ話”はこんな風にめでたし、めでたしの形で幕を下ろすことに・・・。

2019（平成31）年3月28日記